

会社を蘇らせた再建王

現代日本の源流 代表的日本人列伝 — 第三百三十四回 — 坪内寿夫

「実業家坪内寿夫の目標は、常に社会の底辺に在る人々に向けられていた。銀行から持ち込まれる再建依頼をこごとく引き受けたのは、従業員を路頭に迷わせたくなかったからである。普段から、「金も名誉もいらぬ」と言っていた彼が、最後まで支援を惜しまなかったのが、受刑者の更生事業であった。

目標は社会の底辺に
坪内寿夫は、再建王と言われた実業家。グループ企業は180社に及び、年間売上高は8千億円に達していた。グループ企業が膨れあがったのは、誰もがが魅を投げた会社を、蘇らせた結果であった。しかし、坪内の本当の偉大さは、有り余るほどの金を持ちながら、その金で社会の底辺に向けられていたことである。

「映画王」から
造船業へ
シベリアから帰った坪内の前に、死からの生還であり、第二の人生の始まりだった。父の百松と母のキクノは、芝居小屋を営んでいた。坪内は芝居小屋で演じられる芝居や人形浄瑠璃の世界にとつとつと浸かって育った。そこで演じられる勧善懲悪の世界にほろほろと涙を流したという。

「来島の大將」
1953年4月、坪内は来島船渠(後の来島どつく)の社長に就任した。最初の仕事は工場内の雑草抜きと機械のさび落とし。それからドックにたまった土砂を取り除き、ようやく工場は蘇った。が、一向に注文が来ない。他の造船会社に頭を下げて、どこにも下請けを願ったが、どこにも残

「経営の神様」
その後、坪内は奥道の温泉開発、高知重工の吸収合併などを引き受け、来島どつくは、1970年頃

「責任の取り方」
1985年秋、日本は円高不況に見舞われた。これにより、日本の海運業、造船業は多岐にわたる経営危機に直面した。来島どつくも例外ではな

「危機に際し全財産を投げ出す」
大衆の心を掴んだ坪内は、船主たちから「来島の大將」と呼ばれるようになるのである。

「受刑者の更生事業に尽力」
佐世保重工業の経営は4年ぶりに黒字に転じ、翌年には169億円という過去最高の利益を記録し、その年度に債務を完全に返済してしまっ



坪内寿夫の故郷・松前町の自然 (松前町提供)

留学生を 採用したい 企業だけが 参加します。

IFSAでしか出会えない企業、多数

JOB FAIR FOR FOREIGN STUDENTS IFSA 外国人留学生就職フォーラム

参加方法: WEBから登録! <http://www.ifsajp>
ご登録いただいた方には、参加方法や参加企業情報を後日、Eメールでお知らせします。

第1回 東京 3月18日(金)
12:00~17:00 (11:30受付開始)
場所: 東京都立産業貿易センター 台東館4階(北)

第1回 大阪 3月27日(日)
13:00~18:00 (12:30受付開始)
場所: 大阪国際交流センター 2階 大会議室さくら
共催: 公益財団法人 大阪国際交流センター

特定非営利活動法人 国際留学生協会 (International Foreign Students Association)
03-3239-0663 E-mail: kokusai@ifsajp
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-10 タワー一趣町4階